

日商エレクトロニクス

PR

IP電話の導入ハードルを和らげ
信頼性向上を図るPoE対応モデム

従来のビジネスホンからIP電話への切り替えが配線工事レス。現状のIP電話が抱える問題点を解消できる画期的ソリューションがPoE対応イーサネット延長装置、XLP-6800である。

PoE(Power over Ethernet)の規格(IEEE 802.3af)が2003年6月に標準化された。これによりPoEハブからイーサネットケーブルを通じてIP電話機に電源を供給することが可能となった。PoE技術の出現により企業でのIP電話の普及は加速したかのように見えるが、実際には問題点を幾つか残したままの船出となっていた。最近では、災害などによる停電時においてもIP電話を利用して安定した通話が行なえるか否かを問うユーザーも少なくはないのだ。

現状のPoEハブを利用したIP電話網の構成では、各オフィスフロアのPoEハブの電源部にUPS(無停電装置)を設置し各IP電話機への給電が滞ることが無いようにする必要がある。これではUPSの維持管理コストが膨大になってしまい、現実的ではない。また

PoEは最大接続可能距離が100mであり工場のような大規模施設への導入において大きな障壁となっていた。

日商エレクトロニクスが発表した米国タットシステムズの新製品XLP-6800は、電話線を利用してデータ通信を行なうDSL技術とPoE技術を重ね合わせることで、電話線を通じてセンター装置(XLP-6812)から最大3km先のリモートPoEスイッチ(XLP-6802)に対してデータ通信と電力供給を実現させた。このリモートPoEスイッチはセンター装置から供給された電力を利用してその先にあるIP電話機への給電を可能とした。これは従来のPBXとビジネスホンの仕組みと相違なく、電話線を通じてIP電話機へ給電する仕組みなのだ。現状ではPBX側にはUPSを設置しているが、各フロアにUPSを設置しているケースは少ないだろう。それもその



XLP-6812



XLP-6802

はずである、ビジネスホンは電話線を通じてPBXから給電され機能しているため、電話機自身に電源が要らないからだ。

XLP-6800を使用すれば従来のビジネスホンで使用している内線電話網をそのまま利用してIP電話システムを構築できるためフロア内の配線工事や電源工事が不要となる。災害時の停電でも通話障害を発生させないIP電話システムを容易に構築できる点は従来のネットワーク機器には無い大きなメリットだ。またセンター装置とリモートPoEスイッチ間の通信速度は最大で双方向68Mbps、3km離れていても5Mbpsの双方向通信を可能とし、その時の伝送遅延は1msec以下であり通話に支障のないレベルなのだ。

信頼性の高いIP電話システムを短期間・低コスト・シンプルに構築できるXLP-6800の画期的な技術を活用することで、今後のIP電話の普及は加速度的に向上するだろう。

お問い合わせ先

日商エレクトロニクス株式会社
パートナー事業本部 営業統括部
第五グループ
TEL : 03-3544-8324
<http://www.nissho-ele.co.jp/product/poe/index.html>

図 ビジネスホンとIP電話の構成例

